

## 大嘗祭の淵源

——雲南の新嘗を手がかりに——

欠端 實

一、はじめに

ただ今、ご紹介にあずかりました、欠端と申します。今日は、司会の方からお話がありましたように、「大嘗祭の起源は雲南の新嘗を手がかりに」ということでお話をさせていただきます。ただこの大嘗祭に関しては、私は全くの素人でございます。専門は中国史でして、最初、シルクロード地帯を旅行しておりましたが、最近では雲南省の方に毎年通うようになりました。特に一九九八年から半年、雲南省の、特にハニ族の村落に入りまして、新嘗の様子をいろいろ村人に聞いて回り、同時にまた新嘗祭を実際に見せてもらいました。日本史に関しては素人ですが、雲南省の少数民族の新嘗を通して大嘗祭を考えると、今までの研

究者とは異なった考え方ができるのではないかとということで、お話をさせていただきますと思います。

ハニ族の人々をはじめ、雲南の少数民族の人々はほとんど国家を形成したことはありません。ですから、ハニ族の文化と日本文化を比較するというのは、かなり無理なところがあります。日本は早くから国家を形成し、特に大嘗祭というのは天皇の即位に深く関係するわけでございますが、非常に政治的な側面が強いわけですが、ハニ族の場合は国家を形成しておりませんので、日本のように政治的な色彩というものは、新嘗そのものにはほとんど無いと思います。

しかし政治的な側面は、日本史の方々がもう既に研究し尽くし

ているところでございまして、そこには今日は全く足を入れることは致しません。ただ新嘗祭には宗教的な側面が強いものがあり、それと日本の大嘗祭の宗教的な側面、この両者を比較するということに止まるかと思しますので、あらかじめその点をご承知おきいただきたいと思います。

## 二、照葉樹林文化―雲南と日本の比較

日本も雲南も、いわゆる照葉樹林文化圏の中にすっぽりと入っています。特に雲南省は照葉樹林文化の中心的な場所です。日本も西日本は照葉樹林文化であるとなっておりまして、そこで従来、中尾佐助氏から佐々木高明氏に至るまで、多くの方々が照葉樹林文化に関する研究成果を発表してこられたわけですけれども、照葉樹林文化圏の文化にはいろいろな面で共通した要素があることが指摘されてきました。

まずその事を最初に確認しておきたいと思います。照葉樹林として、カシとかシイとかタブとかクスノキ、ツバキ、サザンカなどがあります。日本で神棚に飾られるお神をはじめ、オガタマノキ、シキミ、ユズリハ、ヒイラギ、これらは全部照葉樹です。従って、日本人の信仰とか宗教の起源の一つは、古い時代に照葉樹を崇拝する、特定の樹木を崇拝するということにあるのではな

いかと思われまます。

『古事記』仁徳天皇の条には「葉広扇つ椿（はびろ・ゆつ・ま・つばき）」という記事が出てきます。雄略天皇の条にも同じ言葉が出ております。この「ゆつ」というのは、神々しいという意味で、神々しい椿ということですが、雄略天皇の条には、「厳・櫛（い・つ・かし）」とありますが、この「いつ」というのは漢字では厳格の厳ですが、「尊厳な」とか、「靈威ある」という意味でして、ここでは靈威ある櫛となります。『古事記』『日本書紀』の時代には、このように樹木に対して尊敬を通り越して、神が宿る木という考えが定着していたということが分かります。

ちなみに言いますと、私たち毎朝、神棚にお参りするわけですが、神棚は日本人の生活空間そのものを表しているように思います。日本の国土の中心部はほとんど森林地帯です。今でも七〇%近くが森林という世界でも大変珍しい国だと思えます。人が住んでいるのは海岸の近くの平地ですが、海も近いし、それから水田、水田の後ろはもう山であるという、こういう配置です。山にある木、自然としてのお神が神棚に供えられます。そして食の代表であるお米と、海のシンボルである塩が供えられます。さらにお米に必要な水が供えられます。海に近い平地で、後ろがすぐ山であるというような所に大部分の日本人は住んでいます。海・平

地・山、そういう三者が結合した生活空間、それがいみじくも神棚として現われています。お榊があつて、お米があつて、そして塩がある。いつごろから現在ののような神棚にお参りする形式が出来上がったのか知りませんが、はなはだ面白いと思えました。

それから照葉樹林文化では、モチとか納豆のようなねばねばした物を好む文化があります。私は中国へ毎年のように出かけますが、中国の北の方の人は納豆を食べることができませんでしたが、二、三日前の新聞に、中国人が爆食を始めたということがです。日本の納豆会社は中国へ工場を建てて、売れて、売れて笑いが止まらないようです。私はその記事を見て、本当にびっくりしました。南の人たちは食べますが、北の人が納豆を食べるのかなと半信半疑です。とにかく中国人が日本へどっと観光旅行で来るようになって、日本人の生活、あるいは食生活に触れて、それで納豆に目覚めたような気配であります。とにかくおモチとか納豆とかいう、ネバネバした物、それが非常に照葉樹林文化の特色ある食べ物になっています。

それからお茶ですが、照葉樹林文化圏の人は非常によくお茶を飲みます。このお茶は中国の北の方にはありません。南の方だけです。お茶は早くからシルクロードを通じて運ばれました。シルクロード地帯にはトルコのイスタンブールまでチャイハネ、チャ

イハナがあります。お茶を飲ませる所です。アフガニスタンまでは緑茶も飲みます。イスタンブールを超えると、コーヒー文化になってしまいます。陸路を運ばれたのはチャイですが、もう一つお茶には「テ」という発音がありまして、これは海のルート、マリンルートを通じてヨーロッパに行くわけです。そうすると、「ティー」になります。もともと、サンティアゴ・デ・コンポステラに行った時に、「テ」というのが売っていました、紅茶だろうと思っていました。よく見るとお茶でした。緑茶です。びっくりして、それを買って求めてきました。誠に上品なお茶でした。アジアにはない味わいですね。とにかくお茶文化がシルクロードを陸のルート、海のルートを通じて運ばれていたわけです。

さらに竹の文化があります。竹の下駄を展示しておきました。舞台の上での踊りにも女性がきれいな下駄を履き、棕櫚の葉をかざして舞う踊りがあります。またお米や調味料を保管する太い竹もあります。それに米を詰めて、囲炉裏の上に置いておきます。そうしますと、虫が付きません。長持ちできるといふわけです。

竹の文化も実は紀元前から、雲南から遠くアフガンまで運ばれていました。中国の前漢の武帝の時に張騫が匈奴との闘いのために今のアフガニスタンの北の国境になっているアムダリヤまで行くくと、中国の絹と竹製品が出回っていたということを張騫は報告



筏 太い竹で筏を造り海へ



祭母物語の伝播ルート 雲南から日本へ

しています。非常に早くから雲南の照葉樹林文化圏のお茶、竹製品、絹製品、そういうものが西南シルクロードを通って今のアフガン辺りにまで到達していたということが分かります。雲南は奥地の孤立した地域ではありません。西南シルクロードによってインド、アフガニスタンにまで照葉樹林文化圏のいろんな産物が、われわれが考えている以上に広く運ばれていたということが分かるかと思えます。

最後に、竹製品で申し上げておきたいのは、筏です。漢字には竹冠のついた字がたくさんあります。例をあげると籠、荃、箕、策、篩、箭、筵、簾、笛、笙、筒、篁、箱、笠、櫛、笄、篋、筆、箸、管など今ではなかなかお目にかかれないような字もあります。そして筏です。ちゃんとした船を作れなくても、太い竹がありますから、それを一〇本ぐらい横に並べて結わえると筏になります。実際に現在でもジープや牛を乗せて対岸へ渡っている光景を何度も見てきました。

何を申し上げたいかというと、照葉樹林文化圏の中心にある雲南は、山奥の孤立した地域だというふうには思ったら大間違いだということなんです。陸路、シルクロードに結びつけられているばかりではありません。雲南を流れる大河によってミャンマー、ヴェトナム、広東にまでつながられています。言ってみれば雲南は文明

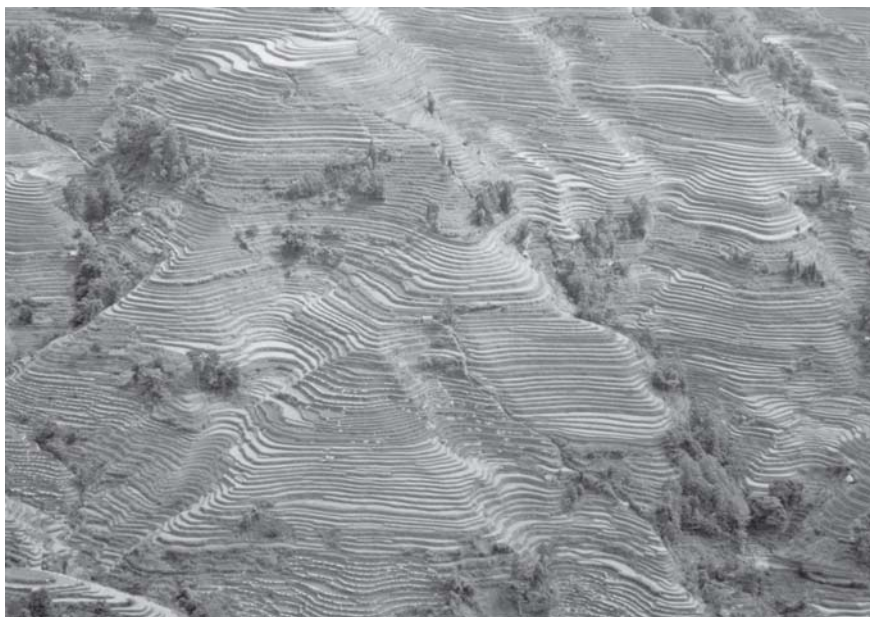
の十字路だったのです。

雲南省の西部に三川地方と呼ばれる地域があります。西から怒江、瀾滄江（メコン）、金沙江（揚子江）の三本の大河が極めて接近した所を流れています。怒江はミャンマーに流れ出ていき、メコンはタイ・ラオス・カンボジアを通ってヴェトナム領で海に入ります。金沙江は揚子江につながりますがハノイにも通じています。

それから、哀牢山近くにある新平県の物語（祭母物語）が、金沙江につながる紅河を下ってハノイに出ます。新平県の物語、これは神棚（祖先棚）の由来譚ですが、神棚（祖先棚）というのは、母親の化身です。その説話がハノイから海へ出て、海南島そして中国の海岸地帯を北上して、台湾の北で今度は沖縄に入ります。与那国島、宮古島を経て沖縄本島に伝わり、長崎まで来ています。長崎から先にはバリエーションの異なる物語として伝播している可能性があります。

これはただ単に物語のルートだけではなく色々な物や人がこのルートで日本に入ってきている可能性が強いと思われます。そういう意味で、照葉樹林文化の中心である雲南と日本はどこかでつながっていると言わざるを得ません。

ご存じの通り『竹取物語』はここから出ています。ルートは分



棚田 2000メートルの山全体が棚田（世界文化遺産）



聖樹 樹木崇拜が強い

かりませんが遠く日本にまで運ばれたわけです。

最後に雲南の棚田について申し上げたいと思います。元陽県の棚田は世界文化遺産に指定されましたが標高二、〇〇〇メートル山が全部棚田です。水はどうするのかという問題がありますが、水は山のとっぺんから湧きます。それを山裾の田んぼまで隈なく流して行きます。

ここは昔は照葉樹林地帯でした。それを切って切って切り倒して水田にしあげました。現在でも雲南のハニ族、ハニ族だけではありませんが、樹木に対する信仰が非常に強くてしめ縄が張られた御神木もあります。御神木には女神が宿ると言われています。日本にも古くから聖樹がありました。ご存知のように伊勢神宮で一番神聖な場所は心の御柱です。

ともかくハニの人々は木を切り倒していきました。自分たちが親しみ大事にしていた樹木でしたが、稲作が伝来してきた時に、木を切らざるを得ないというので木を切り、森に住んでいた動物を殺し、土の中にいる虫さえも殺していきました。その結果として、この世界文化遺産の棚田ができましたが、ハニの人々は強い後悔の念を持っています。長い長い詩—古い歌が残されています。

こんなわけで雲南省でも照葉樹林が非常に少なくなっていると

思います。現在、中国では木の伐採は認められていません。

日本でも西日本に照葉樹林があったわけですが、いま極めて少なくなっています。宮崎駿は照葉樹林文化というものに初めて触れて、立ち直っていきます。彼は救われてからアニメ制作のために屋久島ロケに行っています。

最初は樹木に対する信仰が非常が強かったのですが、後にお米を栽培するようになってお米に対する信仰が非常に強くなってきたのではないのでしょうか。

私自身お米に対する意識が変わってしまった小さな体験を申し上げます。二〇一一年に皇居奉仕をさせてもらいました。奉仕作業では、陛下お手植えのマンゲツモチが刈り取られていて、このモミを取ってくださいといわれました。脱穀するのかなと思いましたが、手で一粒一粒取ってくださいとのこと。大きなブルーのシートを敷いて、その上で一人ずつ一束もらって、手作業をさせてもらったことがあります。私は一粒欲しいなあと思いました。やがて作業も終わり、ブルーのシートのゴミを崖からきれいに払って、これで終了となりましたが私は諦め切れずに、目を皿のようにして探しまして、とうとう一粒のモミを見つけたことができました。セロテープで葉書に貼って、友人に送りました。友人が翌年その一粒をまいてくれました。幸い芽が出て、その年は二五

〇〇粒の収穫でした。二五〇〇粒が翌年には二四キロになりました。さらにその翌年は三〇〇キロ、つまり三年後に三〇〇キロになってしまいました。このイネの生命力に本当にビックリしてしまいました。

私はあらためてお米の生命力というものに驚かされると同時に、私自身も同じ生命力を与えられていることに思い至って、以来、精神的にスカッとして、なぜか生活全体に一本筋が通ったという感じでした。毎日それこそ神棚にはマンゲツモチをお供えしていますし、翌日、ご飯を炊く時にはお供えしたマンゲツモチ下げて、それをパラパラとまいて炊き上げ、炊き上げたご飯を今度は仏壇にお供えし、家族もいただくということで、マンゲツモチ一点張りです。何とも言えず筋が通った日々が生まれたという感じでした

住まいに関してハニ族と伊勢神宮との比較をしてみたいと思います。ハニ族も支系によって異なりますが、比較しやすい例を挙げてみます。ハニ族は人が住む家の隣にはお米(モミ)を貯蔵する倉を作っている支系があります。その理由を尋ねてみると、お米は神聖なので人間と同じ家屋の中に住まわせるわけにはいかないうという答えでした。どちらの建物も、屋根には千木や鰹木を付けた高床式です。伊勢神宮の内宮、外宮を思わせるような構造に

なっているわけです。このような所もどこか照葉樹林文化圏として共通する文化があるような気がいたします。

### 三、神としての稲

とにかくモンsoon稲作地帯の人々のお米に寄せる期待というのは大変なものです。私は二〇〇三年四月、インドネシアのバリ島クラビタン村で一週間かけてのお祭り、各家の稲の神ならびに祖先神を祀るお祭りを見学・調査したことがあります。家々で祀っている稲の神、祖先神を全部集め、それを清めていく祭りでした。お寺で山の聖なる水で清め、さらに海浜に移動して海中の水を汲んできて清めていく。それから参加した人間をも清める。終わると各自が清められた米粒を少し貰い受け、自分の家の稲の神、祖先神を持ち帰っていくという、盛大なお祭りを全部見せてもらいました。お米を作っている人々のお米(稲の神=デウイ・スリ)に寄せる信頼は誠に強固なものがありました。

日本の農村もごく最近まではあったかと思いますが、今はほとんど消えてしまいました。日本人の精神性というべきものが、だんだん変わってきているように思いますが、幸い雲南省では、お米に寄せる信頼はまだ絶大なものがあります。しかしこれもまたたく間に消えていくかもしれません。今やどんどん都会の文化が



入ってきていますから。

私は二〇一五年の新嘗の日に、雲南省の墨江県のある親しいお宅に伺いました。昔はこの日は最大の祭日で牛を殺したそうですが、今はもう牛を殺さないと言うことでした。しかし、「これは牛肉ですよ」と、牛肉の料理を一皿出してくれました。昔は一頭の牛を殺しましたが今では牛肉三〇〇グラムとか五〇〇グラムの料理でおしまいです。やがて牛肉の料理も出てこなくなり、すべてが忘却の彼方に……ということになるのかもしれませんが。

雲南省の村は両極端に分かれているようです。伝統的文化を残そうと頑張っている村と、伝統的文化を捨て去った村と二種類です。今後、村の幹部がどういう選択をするかということがとても大切であると思います。

それでも雲南省のハニ族の村々には「稲なしには人間は生きていけない」、そして一粒一粒の米の中に稲魂が宿っているのだという確信が、非常に強く残っています。私は二〇一四年、牛肉の料理を食べさせてくれた御宅を訪ね、マンゲツモチの稲穂を二本ばかり持っていきました。そして二〇一五年に再び訪ねました。八月でしたけれども、もう収穫が済んでいて、マンゲツモチがこういうふうになりましたよと見せてくれました。見ると実に立派なマンゲツモチになっていました。今年（二〇一五年）は、どん

ぶりいっぱいのモミを持ってこいということでしたので、どんぶりいっぱいのマンゲツモチのモミを持っていきプレゼントしました。来年（二〇一六年）はどれだけの収穫になっているのでしょうか楽しみです。きっと素晴らしい収穫を上げるのではないかと楽しみにしています。

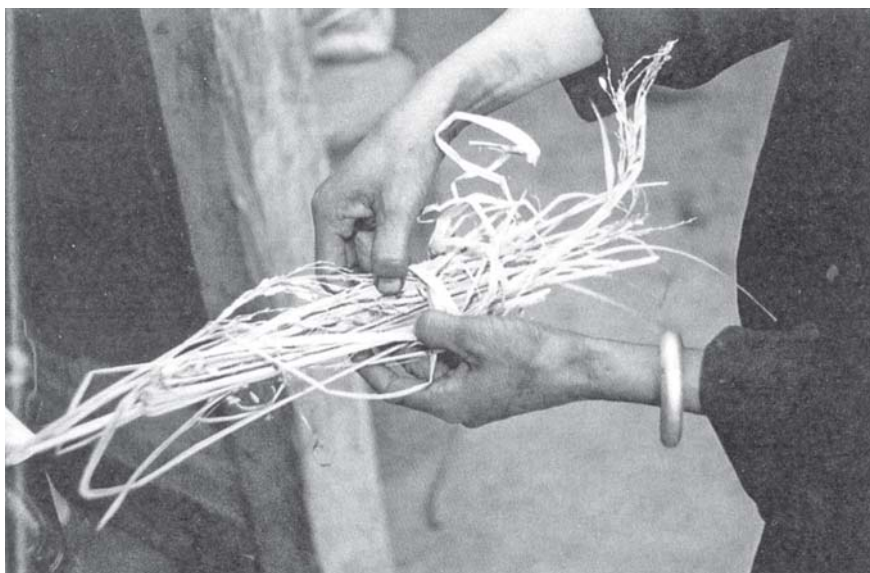
雲南省のハニ族では（ハニ族に限らず大方の少数民族の間では）、お米は特別の作物であると思われています。記紀によれば、日本でも稲は普通の粟・稗・麦・豆などは「陸田種子（はたけつもの）」と呼ばれるのに対し、稲は「水田種子（たなつもの）」と呼ばれ区別されていました。これは「種のもの」だと解説に出ていましたが、果たしてそうなのでしょう。

記紀では「板拳」と書いて「タナ」と読ませています。そうしますと「たなつもの」は神棚のものと解釈できるのではないのでしょうか。

ハニ族の神棚は祖先棚（アペボロ）と呼ばれていますが、木で作られているものもあり、シノ竹で作られているものもあります。この祖先棚の下の方に新嘗の時に採ってきた稲穂を掛けます。祖先棚の上には御祖先の形見の品などを置いておきます。日本風に言うと、上は仏壇、下は神棚という感じで、神棚と仏壇を一緒にしたものが、ハニ族の祖先棚です。



祖先棚 上に御先祖の形見、下に稲穂



稲魂 稲魂が宿る稲穂

『古事記』の「たなつもの」は、「棚に挙げるもの」と解釈できないでしょうか。

そして稲は他の作物と違って、「斎庭（ゆには）」「高天原にきこしめす斎庭（ゆには）」の稲」という言葉がありますように、とにかく神に捧げる稲を育てるための神聖な水田で作られているということ、稲が特別視されているということが分かります。

それからイザナキノミコトがアマテラスに御頸珠（首飾り）を授けましたが、その御頸珠を「御倉板拳（ミクラタナ）の神」と記されています。しかも御頸珠は稲（稲魂）をシンボライズしたものと解釈されています。そうしますと、お米は棚に供えられたのではないかと考えられます。そういう意味では、稲は特別な作物とされていたと思われます。

そのように神聖視された稲は、特別に神様から与えられたもの、天から与えられた作物であるという考えが当然、出てきます。

ハニの伝承説話によると、天上の神とその子供が―子供の場合には女性の場合が多いのですが―天の神とその子供（女性）が稲を人間界へ運んでくれたという、そういう内容のものです。これは『古事記』『日本書紀』と内容的に非常に近い。タカミの神、アマ

テラス大神が子供のオシホミミノミコトに、そしてさらに孫のホニニギノミコトにとというのが『古事記』ですし、『日本書紀』もタカミムスビノ神が孫のホニニギノミコトへと、稲が天上（高天原）からもたらされたという記述です。稲を神聖視しています。

二〇一五年の八月に石垣島へ行き「オンプール」という収穫祭を見せてもらいました。その祭礼の最後に行われる儀礼は、五穀の種を授けるといふ儀式でした。神様が出てきて、そして神様から巫女に五穀の種を授ける。渡し終えらると、また東西に分かれていく。その儀礼をもつて祭礼は終了します。その意図するところは、村人に、米は神から授けられたものだということを見せる、知らせる、再確認してもらうことだろうと思います。要するにお米は神聖だということです。その神聖さというのは、とにかくも、のすごい生命力を保持しているということです。マンゲツモチのお話をしましたが、一粒のモミが三年後には三〇〇キロになってしまう。そのすごい生命力、それに私自身が驚いたわけですが、昔の人も―昔はそんなに多く採れなかったかもしれませんが―とにかく米というのはすごい生命力があつて、連作も可能だということです。しかもおいしいのです。そのため神聖視されそれが嵩じて神から授かったものと考えられるようになったと思

ます。

ご存じのように『古事記』『日本書紀』ではホ(穂)という呼称を持った神様の系列が、アマテラス大御神の子、アマノオシホミミノミコトから続いて神武天皇にまで至っております。神武天皇からは人の世になるわけです。神の世から人の世になっていく過程でホ(穂)が神名として連続しています。これは高天原から人間世界へ稲米が伝えられたということを述べようとしています。

そしてその稲には稲魂が宿る、神が宿るといことです。絶大な生命力に驚いた人たちは、そこに神聖性をも見て取ったということではなからうかと思えます。

この写真は、珍しい写真です。(五〇頁)おばあさんが「これ、稲魂が宿っている稲穂だよ」と言っていて、つと納豆のようにワラで包んだ稲穂を見せてくれました。これを積み上げたモミの山のてっぺんに置いておくと言っていました。

ハニの人々は祖先棚に稲穂を下げておきますが、火事があった時には、まずこれだけ持って逃げろというふうに言われています。これさえあれば何とか生きていけるということです。照葉樹林帯は暖かいですから、一年中、タケノコが出ますし、ワラビ、ゼンマイは採れるし、植物が豊富です。何とかしのいでいるうち

に、お米の大きな収穫に恵まれるということでしょう。とにかく火事だという時には、祖先棚の稲束を持ち出せといわれています。

石垣島での「オンブール」を二〇〇四年にも、また二〇一五年にも見ていますが、お祭りは全部女性の神司(カンツカサ)が牛耳るのです。お祭りの時に、来年は豊作かどうかを占いますが、神司が小さい箱に入れたモミを取り出してパラパラと撒きます。その散らばり具合で判定するようです。今年もそれを見せてもらいましたところ、来年二〇一六年は豊作だということでした。

#### 四、人間は稲魂の子孫

人間はお米を神様からいただいたいて、お米を中心に命をつないできました。稲作モンスーン地帯の人たちはそうです。ですから、人間の祖先と稲魂の祖先は同じであるとする考えが育ってきました。ハニの人々の祖先棚は、上には御先祖を祀り、下には新嘗の稲穂を祀る。ですから人間の御先祖と稲米の先祖は起源をたどっていくと一つになってしまうと考えているのです。

ご存じの通り、日本の皇室も御先祖は天照大神、稲に仕えていた巫女です。それが後にアマテラス自身が稲魂であるというふうな考えられるようになり、結局、皇室は稲魂の子孫と見なされる

ようになったと思います。そのことが大嘗祭を新嘗の日に執り行わなければならない理由の一つだと思います。

大正天皇は大正四年一月一〇日に即位され、大嘗祭は一月一四日、京都で執り行われました。

昭和の場合も、昭和三年の一月一四日です。

平成の場合は内閣総理大臣がトップに立って検討した結果、やはり日本の伝統的な文化であるということで挙行することになり、平成二年一月二二、二三に大嘗祭を執り行いました。この時は祭儀が終わって、建物を取り壊して焼いてしまいましたが、その前に一般公開してくれました。非常に粗末な建物でした。

大嘗祭の挙行に関しては何の規定もありませんが、日本の歴史を考えていった場合、日本文化のアイデンティティとしてどうしても稲というものは抜き去ることができないということで、大嘗祭は続けてほしいと思います。

とにかく日本人のアイデンティティとして米があつて、それが理由で大嘗祭は、新嘗の日に挙行するのがふさわしいということになると思います。

##### 五、新嘗の日はあらゆる霊が集うおめでたい日

新嘗の日というのは一体どういう日なのでしょうか。私たちは

新しいお米が採れる日、あるいは稲魂を迎えにいった、稲魂が我が家に戻る日と考えるかもしれませんが、ハニの人々に聞くと、いろんな霊が帰ってくる日だと言います。飼っていた家畜の霊も帰ってくると言います。御先祖も帰ってくる、稲霊も帰ってくる、家畜の霊も戻ってくる。もう本当ににぎやかなおめでたい日だと言います。新嘗の日にはその家にかかわるいろいろな霊がもどって来る全員集合の、賑やかな、おめでたい日です。

そこで例えば、新嘗の日に松飾をします。そして稲魂を迎えます。帰っていく時には、それを焼きます。

新嘗の日には、新米で炊いたご飯をお供えして、その後みんなで一緒に食べます。特に結婚して出た女性たちも全部帰ってきて新米のご飯を食べなければなりません。これは、稲魂を受け継ぐのは女性という考えがあるからです。沖縄においても同様な考えがあるようです。タイのツンマン村でも稲魂を受け継ぐのは女性でした。ですからおばあさんのベッドの上に神棚がありました。さらにおばあさんのベッドの隣にも一つベッドがありましたので聞いてみると、これは神様が来た時にお休みになるベッドです、という返事でした。極く最近まで、六月四日に女性だけで稲魂の祭りをしていたということでした。ただ最近では男性も参加するように変わってきたらしいのですが。

モンズーン稲作地帯というのは、稲作文化においても女性性が強いようです。日本でもアマテラス大神が登場します。

先ほど触れましたハニ族の祖先棚は実はお母さんの化身だということが、説話の中で語られています。ここにも女性性があらわれています。

それでは日本の場合にハニと同じように全ての霊が戻ってくるのでしょうか。どうもそのような気配です。毎年の新嘗祭にはこの水田で獲れた米を使うかに関して規定はありませんが、大嘗祭の場合には悠紀殿、主基殿として、全国で二カ所、東日本と西日本で水田が指定されます。

平成の大嘗祭の場合は、平成二年一月二二、二三日で、悠紀殿は秋田県、主基殿は大分県の水田が指定されました。そこから収穫されたお米で大嘗祭が執り行われました。実はその二つの水田はシンボリックに二つ指定されただけで、実際には「全国の水田」という意味が込められています。したがって悠紀田、主基田の水田から稲魂が集合したということは、全国の稲魂や土地の神も全部集合したという意味が象徴的に込められています。

ハニの場合とは異なり、国家を形成した日本では政治性が増えられていますので、日本全国の稲魂、そして全国の国々の神、それらが全部集まる日と考えられているようです。



也波（イエポー）氏 モポー（祭祀の指導者）

ハニ族の場合、子供たちが結婚して外へ出た場合に、そこで祖先棚を作ることはできません。必ず自分の実家に戻って、新嘗に参加しなければなりません。家長が死んだ場合にはその後の新嘗の日に限って、祖先棚を作ることができます。作るのはあくまで新嘗の日です。このことを教えてくれたのは也波（イエポー）氏でした。この方はモポーという祭司の指導者です。彼は雲南だけ

ではなく呼ばれてミャンマーの方にも出かけるなど国境を越えて祭祀の指導にあたっています。家長が亡くなったら、祭祀の新しい主体者となった子供たちは次の新嘗の日に祖先棚を作ることができるということ、彼は指導をしているわけです。

やはり新嘗の日というのは特別の日であって、その家に関係した霊が集まる非常ににぎやかなおめでたい日です。その日に祖先棚を作って、みんなを迎え入れるというのは祭祀の本筋だろうと思います。そのような理由から、日本の場合にも、大嘗祭を新嘗の日に執り行うことになったのではないか、そのような宗教的な理由があったのではないかと思われま

す。大林先生の論文によりますと、日本では新嘗の日に殺される王が多いし、同時に新嘗の日に出現する王も多いと述べられています（『東アジアの王権神話——日本・朝鮮・琉球——』弘文堂、一九八四年。二二二頁以下）。これは新嘗の日というのは何か特別の日であるということが、共通の認識とあつたのではないかと思います。殺されるというのはどうということかと、要するに新嘗の日に政治権力の交代がある。祭祀の主権者が交代する、新嘗の日はクーデターも許容されるということだったのでないかと思ひます。

新嘗の日に新たに王が出現するというのはお分かりになると思

いますね。継承して新たに祭祀王としての王が誕生したということとであります。

殺されるというのは、要するにそれはある意味でクーデターです。新嘗の日なら祭祀権を継承し交代してもいいということですから。それを逆手に取るとクーデターになってしまうわけです。つまり新嘗の日というのは、祭司を継承する、日本の場合は政治権力の交代の日と言ってもいいのかもしれない。

従って、大嘗祭という新嘗の日に悠紀殿、主基殿という二か所（全国の水田を象徴している）からの稲魂が集まってきて、それを天皇陛下が受け止めて、そして祭祀王としてそれを祭る新しい主権者として宣言をする日ということで、大嘗祭が新嘗の日に執り行われるということになったのではないかと思います。

今後やはり日本の伝統的な文化として、新嘗の日に大嘗祭を執り行うということが続いているのではないかと思いますし、私自身は個人的には続いているってほしいというふうに考えております。日本文化のアイデンティティとしての米、稲作、あるいは稲魂、そういうものを大切にいくということが大事ではないかと個人的には思っております。

米が日本人のアイデンティティになっていったということは、争えないことではないかなと思いますし、それを守っていくとい

うことが大切ではないかと思えます。

付記 下記の拙著・共著ならびに拙論をご覧いただければ幸いです。

1. 『聖樹と稲魂』近代文芸社、一九九六年。
2. 『文明の風土を問う』麗澤大学出版会、二〇〇六年。
3. 「稲魂文化―モンソン稲作地帯の稲魂文化」比較文明研究18号、二〇一三年。
4. 「アジアの新嘗―いのちの継承・聖化・再生―」同上19号、二〇一四年。
5. 「雲南の新嘗と日本の大嘗祭」同上20号、二〇一五年。